

## 【へりくだり】

春なのに珍しく雪の降った日、ぼくの家にも、ぼくを訪ねて来た人がいる。  
ぼくを訪ねるなんて、変な人です。  
きちんと背広を着た、中年の紳士で、ちっとも変には見えませんが。

「金ちゃんさまでいらっしゃいますか」

へりくだった人間は、なにか魂胆（こんたん）があると、子供ながらに解っていましたから、

「ちゃんとさまをつけるのは、かんしんじゃがのう。ちゃんにさまをつけるのは、かみさまを、かみさまちゃんとよぶのとおんなじじゃ。かみさまも、あきれるじゃろう」

「それはそれは失礼をいたしました」

丁寧に頭を下げる。

「あやまらんでもええ。わしはおこっちょらんよ」

「いやはや金さまには、寛容（かんよう）でいらっしゃる。金さまくらい、私も人間ができていればいいのですが」

「じゅうぶんできとるとおもうよ。しかしそこはさむいじゃろ」

云いながらぼくは、あばら家の中に手招きしました。「金さまのお部屋に入るなんて、そんな畏れ多いことはできません。私はここで結構でございます」

「おきゃくさんは、けっこうでも、わしは、さむがりでのう。こんな、つめたいどまに、いつまでもたつとつたら、いずれ、こおりにんげん、なっちまうだよ」

ぼくは両手に息を吹きかけました。

「それはそれは気づきませんで。私ともあろう者が、金さまの寒がり知らないだなんて、情けない話でございます」

「なさけない、なんちゆうことは、なかりう。なさけないのは、ゆきがふつとるのに、だんぼうもない、わしのいえじゃ」

「暖房はなくとも、金さまは金さまですから、暖房よりもずっと暖かいものがおありでしょう」

この紳士のへりくだりぶりが、だんだん気に触ってきていました。

「そんなものは、ありやせん。あつたら、ふるえてなんかおらんぞい」

ちよいと声が大きかったのか、紳士はもっともっとへりくだって、

「これはこれは、金さまを怒らせてしまいましたか。大変な失態をしてしまった私は、もう切腹ものです」

「おおげさじゃのう。だいたい、わしになんのようなんじゃ」

ぼくは前置きの長い人は、好かないのです。

「用といたしますと、何か用がございますので」

「ようがあるから、きたんじゃろうが」

「わ、わ、わ、私のことでございますね。そうそう、そうです、用がなければ訪ね

てこないわけですからね」

「そういうこっちゃ」

「そうですよね。いやはや、まことに失礼をいたしました。こんど訪ねてくる時には、必ず用を作ってまいりますので、本日はどうかご勘弁(かんべん)ください」

「わしは、べつだん、どちらでもええんじゃがのう」

「いやはや、まことに失礼をいたしました。それではこれにて引き上げさせて頂きます。金さまにはどうか、お元気でお暮らしてくださいませ」

そうして、紳士は雪の中を、傘もささずに去って行きました。